

---

# 純白

EMu

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

純白

### 【コード】

N3820U

### 【作者名】

EMU

### 【あらすじ】

” 16 になる頃、迎えに来よう。”

生まれたと同時に生け贄として、邪悪な竜に差し出されることになったお姫様。

しかし、それは彼女がまだ生まれたての時のことでした。何も知らないその女の子は小さな村でひっそりと過ごします。

なにも知らないまま、無垢なまま…

やがて時は流れ、彼女は16歳になり……

悪竜と少女の日々が始まります。

## 少しの希望を

ある王国の城の中で一人の可愛らしい女の子が生まれました。  
その子はハイネと名付けられます。

城で王様や貴族たち、はたまた妖精も集まって祝福します。  
その子の誕生に国中の人々が祝福したのでした。

3人の妖精たちが玉座に赴くとそれぞれがその子に贈り物を授けました。

一人は美しく、健やかに成長しますように、と。

一人は優しく美しい心を持って、人々の幸せを願いますようにと。

そして、もう一人が唱えようとしたとき、城のなかが急に寒くなり、突風が吹き乱れます。

そして、広間の真ん中にそれは姿を現しました。

緑色の不気味な炎をまとうて現れたのは、全身黒づくめの背の高い大きな男でした。

皆、息を飲みます。

突然の来訪者に辺りはしーんと静まり返りました。

男はまわりにいる貴族たちをぐるりと、なめ回すように見つめます。そして、最後に玉座にいる王様と妃に目を向けます。

まるで、蛇のような仕草です。王様は一瞬ぞくりと震えましたが、見せまいとして平静を保ちます。

じっと、王様も男を見据えました。

お前は何者か？

王様は尋ねます。

男はふん、と鼻で笑います。本来なら、こんな突然やって来た不埒な男など直ぐに捕らえられてしまいます。しかし、今回は誰も動けません。

それほど、この男の纏うオーラは威圧的で危険だったのです。

男は、王様を睨みます。

「その、娘。成長したら私が頂く。」

突然の招かれざる訪問、そして、突然の宣言に会場の人々はどよめ

く。

これには王様も嫌悪の表情をむき出しにします。

「よもや、貴様。何を言ってるのか分かってるのかね？」

いつの間にか、男の回りには兵士たちが剣を突き立てています。

そんなこと関係無いとでも言いたげに冷たく笑う。

「お前こそ、私が誰なのか分かっているのか？」

フードの奥からギリリと赤く光る瞳を向けます。

まるで、化け物のような、凄まじい殺気を向けて。

「我が名は、ジエイドラゴン。忘れたわけではあるまい？契約として、生け贄を貰う。」

そこで、王様ははっとした目をします。

「その赤子が16になる頃貰おう。」

王様が呆然としている間に男は凄まじい黒い突風となって去っていった。

皆、魂が抜けたように呆然としていた。

「あの者は一体なんですか？」

会場がざわめき、王妃様が泣き出しているとき、一人の妖精が尋ねました。

王様は妖精を見る。妖精も顔面蒼白になってはいたが、何とか冷静になろうとしている。

「あの者はジェイドドラゴン。黒い森に棲むと言われる黒き邪竜。」

「何故あんなものが？」

王様はため息をつきました。そして、こう続けます。

「我々の祖先は大きな過ちを犯したのだ。

国と国が争いに明け暮れる中で、生き残るためにどうしても大きな力が欲しかったのだ。

毎日大砲、強固な城壁を造る。毎日人や馬が死んでいく。

罪の無いものもどんどん死んでいった。

このままでは国が滅びてしまう。

そんななか、黒い森に棲むと言われる竜に協力をしてもらったらどうか、という案が出た。

賛否両論だったが、結局は森に赴くことになった。

元々、黒い森がどこにあるかも定かではなかったが。

探し求め、何カ月も奥地を歩き、ようやく見つけたらしい。

そして、我々の祖先は契約を交わされることになったらしい。

国に力を貸す代わりに、生け贄として、生まれた子を差し出せと。

だが、最近はずっとそんなことなど無かったのだ。ただの伝承に過ぎないとさえ思っていた。

なのに、今になって。

あの、話はまだ続いていたのかと……」

王様は嗚呼を漏らしました。

せつかくの祭典だというのに、会場は一気にどんよりしてしまいました。

だが、一人の妖精が進み出ます。

「大丈夫です、王様。そんなことさせません。」

王様は怪訝そうに妖精を見ます。でも、少しだけ希望を持ってくれたようです。目に光が灯ります。王妃様も顔をあげてくれました。

「どつすると言っただけ？あの竜は、国一つ相手に戦えるものだぞ。」

「私からの贈り物がまだです。希望はまだ捨ててはいけません。」

妖精は熱のこもった瞳で王様と王妃様を見つめます。

「私からの贈り物です。どんな、いかなるときも、どんな絶望が襲っても希望を持つことです。辛いことがあっても、貴女はきつと乗り越えられる。」

妖精は言いました。

誰かが助けてくれる、ではなく自分で道は開くのだ。

運命は一つではないでしょう。

妖精は与えました。

小さな光が小さな赤ん坊に舞い降りました。

静寂のなか、皆が姫の幸せを願うようにじっとそれを見つめています。



## 曇りの日

あれから数日後、その赤ん坊はひっそりと小さな村に連れていかれました。

誰の目にも止まらぬように。

その赤ん坊はすくすくと成長して美しい娘になりました。

しかし、少女も、村の人々も、少女がこの国の姫であることは知りませんでした。

この村で唯一知っていたのは少女と共に過ごしていたメイドのメアリーのみです。

少女には両親が他界したと伝えてあります。

だから、少女は生まれてからずっとメアリーと一緒に過ごしてきたのです。

もう一人、ハイネには小さな頃からずっと一緒に過ごしてきた青年がいました。  
名前はコネリー。

ハイネよりいくつか年上で優しく頼りがいのある人です。  
ハイネの悩みを聞いてくれたり、困ったことがあれば助けてくれたり。  
この二人はまるで兄妹のような仲でした。

「メアリー、出掛けてくるね！」

ハイネが戸口に立って、流し台にいるメアリーに声をかけます。

メアリーの顔は見えませんでした。奥からお気をつけて、と声が聞こえました。

ハイネは外へと駆け出します。行き先はもちろん、コネリーのところ  
です。

彼はいつも、牛の世話をしています。

ハイネは牧草の芳しい香りや牛の世話をするのが気に入っていたので、いつも手伝いに行っていました。

なにより、ハイネにとってはコネリーと一緒に過ごせるのがとても嬉しい事なのです。

小走りで、木造の家の並ぶ通りを抜けていきます。今日の空は曇天で薄暗いのですが、ハイネの心はコネリーに会える喜びで満ちています。

ハイネは村の少し外れにある牛小屋にたどり着きました。

あたりをキョロキョロ見回してコネリーを探します。

と、そこで、白いシャツにベージュのズボン、黒い長靴をはいた青年の後ろ姿が小屋の窓越しに見えました。

どうやら、牛の乳搾りをしているようです。

パタパタとハイネは駆けていきました。

小屋の入り口から顔をひょっこりと覗かせます。

「コネリー、おはよう」

ハイネはコネリーに向かって言いました。

コネリーは仕事を止めるとゆっくりと振り返ります。  
彼の金髪はくるくると巻かれて、あっちこっちに跳ねていました。  
また、少し呆けた顔をしていて、寝不足なのかと心配になります。

「ああ、ハイネか。おはよう。また来たのかい？」

彼は少しおどけた調子で答えます。

「もうコネリー。また来たの、じゃ無いでしょ。」

ハイネはそう言いながらコネリーの近くに行つて、くしゃくしゃになつたコネリーの髪を撫で付けます。が、手を離すとすぐにまた、びよんと戻ってしまいました。

「最近ちゃんと寝てる？」

「さあ、どうかな。」

彼は力なく笑いました。

今日もハイネは長靴を履いてつなぎを着て牛の世話をします。  
コネリーはいつもやらなくて良いよって言うけど…  
ハイネはやりたいのです。

しばらくして、牛が広い牧場に放たれました。

牛が緑の原っぱに白い点となって広がっていきます。  
それを眺めながらハイネとコネリーは近くにあった木のベンチに座  
ってお昼を食べました。

相変わらず、昼になっても空は雲で覆われていて、空気も少し冷え  
ていました。

もう、暖かくなってもいい季節なのに、いまだにここは春と冬の間  
を歩き来しているのです。

ハイネは隣でサンドイッチを食べるコネリーを眺めます。

くしゃくしゃの髪に、眠そうな瞳。

今までこんな疲れたような姿は見たことがなく…ちよっぴりハイネは不安を覚えます。

いつも明るくて優しく…髪は小麦のように風にそよそよと柔らかく揺れていたし、瞳も青く澄んでいたし……

何故か、最近のコネリーは様子がおかしい気がしました。

「何か、顔に付いてるかい？」

あまりにもハイネが見つめていたせいか、コネリーは苦笑しながら聞いてきました。

笑い方はいつもと一緒。

話し方も。

ただ、疲れてるだけ？

「……ううん、最近コネリーの様子が違うから」

少し顔を俯かせてハイネは言いました。

コネリーは少しびっくりした顔をしましたが、すぐに普通の顔に戻します。

「そうか？」

「ん、分かんない。多分、気のせいかな…」

ハインはにっこり笑います。

しばらく、二人は何も話さず、まっすぐ牛たちの方を見つめています。のどかな牧場を冷たい風が通り抜けていきます。

「…僕も、少し分からないんだ…」

曇天の空の下。

しばらくして、コネリーは小さく呟きました。ハインはコネリーを見つめます。

コネリーは何か、凄く悩んでいるようでした。

何か、触れてはいけないようなものに触れようとしているような…

「たかが夢なんだ。でも…」

「コネリー？」

ハイネの呼び掛けには答えず、彼は独り言のように続けます。

「毎晩、同じ夢を見るんだ。ハイネ、お前が暗い闇のなかのまれ  
ていく夢を。」

僕がどんなに手を伸ばしても、届かないんだ。」

コネリーは悲しそうに顔をしています。そして、苦しみに耐える  
ようにギョツと彼は自分自身の体を包みます。

恐怖に怯えたような顔をするコネリーを見守ります。  
ハイネは彼の腕に手を添えました。

「夢なんだ、ただの。でも、とても恐ろしい夢だった。」

コネリーはとても苦しそうでした。

ハイネはコネリーにそっと体を寄せました。

コネリーは、きっと夢のせいで怯えている。安心させてあげなくて  
は…

「大丈夫、どこにもいかないよ」  
ハイネは目を閉じてそう言います。

しかし、コネリーは言えませんでした。ハイネを連れ去っていく黒い闇が何なのかを。  
ハイネにはとても恐ろしい者が迫っていることを。

コネリーが夢で見たものは、黒い男。  
そして、助け出そうとするコネリーを赤く光る瞳で睨むと、そのまま動けなくしてしまうのです。

時には夢のなかで殺されかけたりもしたのです。毎晩こんな夢を見続けていたらコネリーだって恐怖を感じます。

あの男は一体何者なのか、彼には分からなくて。しかし、ただ者ではないことは確かです。

コネリーは一人で悶々と考えます。  
これは、なにかの予兆では？

ハイネは眉間にシワを寄せて考えるコネリーを見つめます。

ふいに、ハイネは彼の頬をつねりました。

「痛っ」

一つ間をおいてハイネは言います。

「…コネリー。大丈夫だよ、夢なんだから。」

心配しないで、というふうにゆっくりとハイネは微笑む。

「それに、私はどこにも行ったりしないよ!」  
頑張って元気付けようとするハイネ。

コネリーも、困ったように笑顔を返します。

「ああ、分かってるよ。」

「ただ、ハイネ…夜の森には入ってはいけないからね。」  
コネリーは静かに言いました。

ハイネはきよとんとした顔になります。

「どうして？」

「どうしても、だよ。危険だから、としか言いようがない。」

彼は言葉を探して、答えているようでした。

ハイネにとっては今更な情報です。けれども、コネリーの深刻そうな顔つきにハイネも真面目に聞き入れました。

彼はハイネから目をそらして、遠く、小さく見える森を眺めました。ハイネも、彼にならって森を見つめます。そこにはいつもと変わらない、動物たちの暮らす普通の森が広がっているように見えました。

終わった誕生日（前書き）

ごめんなさい、丸直してしまいました。

## 終わった誕生日

さて、明日はもうハイネの誕生日っていう時です。

ハイネの気分は16歳になることで、うきうきしています。

鼻唄まじりに夕食の手伝いをするハイネの横で沈んだ顔をしているメイドのメアリー。

「ねえ、どうしてそんなに浮かない顔しているの？」

ハイネは不思議に思って尋ねました。

メアリーはハイネに笑顔を返しました。

「いいえ、ハイネ様。浮かない顔なんて、私ちっともしてませんわ。」

さっと返してきた言葉はそんな言葉。本当は何か隠しているようにも思えましたが、ハイネは黙っていることにしました。だっって、なんだか聞いてはいけない気がしたから……

翌朝、カーテンから太陽の光が漏れて、どこからか鶏の鳴き声が聞こえてきます。

ハイネは、んつと伸びをしてベッドから起き上がりました。今日も朝がやってきました。そして、16歳初めての朝です。

着替えを済ませて意気揚々とキッチンに向かいます。勿論、メアリーに会うために。

しかし……そこにいたのは。

勿論メアリーでした。せわしなくキッチンを動き回り……

朝食が置かれているはずのテーブルには紅茶がいくつか置かれ、自分達の座る椅子には見知らぬ巨大な男たちが陣取っていました。その姿は圧巻です。

ハイネはびっくりして棒立ちになります。

さて、その男たち、テーブルに陣取って何かを深刻に話し合っています。この陣形はどうか、あっちに兵を配置しようとか、もういろいろと。

辺りをうろろろするメアリーは特に何か仕事をしている訳ではなく、なんだか忙しそうにいたり来たりしています。

「あ、あの……」

ハイネはこの異様な空気の中、か細い声を出しました。いや、話し掛けて良いかも分かりません。

すると、そこにいた全員がさっところちらを振り返ります。

あまりの動きに風を感じてしまいます。

メアリーはハイネを見て声をかけようとしたが、それよりも早くテーブルに座っていた一人の男の方が進み出ました。

「これは……ハイネ様。美しく成長なされた。」  
感激といった表情で近付き男は方膝をつきます。  
そして、ハイネの手をとるとそっと口づけました。

「私は軍の隊長、エルマン・ジヨットです。最後に見たのはこんな小さな時でした。」

男はジェスチャーをした。

しかし、ハイネには何の事だかさっぱりでした。依然として、ハイネは何も言えません。

そんなことなど気にしないのか、男は続けます。

「今日はとても危険な日なのです、ハイネ様。だから、今日は我々がお守りすることに致します。」

何、あんなドラゴンなど私共が止めてみせます！！」  
なんだか、物凄い迫力です。

というより、何なのだ、この人は。

男は一礼すると、席に戻った。そう、テーブルで会議やらをするために。

メアリーは依然不安そうに男たちを見つめるばかりだ。  
え、何なの？この暑苦しい人たち。いきなり家に上がり込んで、人のテーブルと椅子を陣取って。

ハイネはいつもは温厚なのですが、少しばかり物騒な事を考えます。

ハイネの不穏な空気にメアリーは慌てて近寄ってきました。

「あの……ハイネ様。大変申し訳ないのですが、部屋に戻って下さいませんか」

何故か、メアリーはそう言いました。

ハイネはため息をつきました。何でだろう？せつかく気分よく起きたのに……

「じゃあ、私、牛小屋行っても良い？どうせこれから行くところだったし……」

ハイネは言いました。しかしそれを聞いたメアリーは血相を変えま

す。

「ダメですわ、ハイネ様。今日は大人しく部屋に居てください。」  
反論はさせない、凄じ剣幕で言うとなメアリーはハイネを部屋に入

れました。

「朝食を後でお持ちしますわ。」

メアリーはそう言うとな外から鍵を閉めました。

いきなりのもので、ハイネは何だかよく分かりませんでした。誕生

日の朝起きたらこれって、無いでしょう。

ハイネはまた、溜め息をつきます。

まるで、だっ

子のよう……

「ね、メアリー。今日何の日か知ってる？」

「ハイネは言います。」

「存じてますわ、ハイネ様。でも、今日はじっとしててください。」

メアリーは辛そうに答えました。  
ハインはメアリーを見つめます。自然と疑いの目で見てしまうので  
すが。

黙々とハインは朝食を食べました。

ハインは言われた通り、部屋にいました。本来でしたら、そんなこ  
とは絶対しません。

隙をうかがって窓からでも出ていくでしょう。  
でも、今回ばかりはそれは出来ませんでした。  
何故かって？

晴れ渡る空のもと、村は異様な空気に包まれていたのです。

先程の男たちは軍なのでしょうか。

村のあちこちに彼らは点在しています。

深緑ともつかない暗い色の鎧をまとった男たちが通りを見張ります。  
隣の家も、そのまた隣も。

窓から見て、その男たちがいない所なんてありません。

そして、極めつけ、ハインの家の前にはその男たちが列をなして辺  
りを見張っています。

彼らは辺りを鋭く警戒していました。

近くを羽虫が飛んでも来たら、

もしくは、蝶がふらりと目の前を掠めでもしたら…

次の瞬間、目にも止まらぬ早さで彼らを粉碎していたでしょう。どんな小さなものも逃しはしない、そんな緊張感が流れています。

何の騒ぎでしょう。

物騒すぎて、村の住民は一切出てきません。

そんな中にハイネがふらふらと出ていけば、確実に殺される気がしました。もしくは、羽交い締めになれ、尋問されているかもしれません。

よく分からない理由で。

だから、ハイネはひとまず、大人しくしていることにしたのです。

森へ

冷たい風で枯れ葉が舞っていました。本来、そんな時期ではありません。

いつもだったら、青々とした葉が太陽に照らされてキラキラ輝いているような季節です。

寒々としていて、村の空気も自然と淋しくなります。

ハイネの誕生日は呆気なく過ぎ去り、本人からしてみれば最低な誕生日。しかし、ある一部の人間にとっては、ほっとした一日でもありました。

木枯しが舞う中、エルマンと部下の男がハイネの家から出てきました。

「では、ハイネ様。私たちはこれで失礼致します。」

家の前に立つと、軍の隊長、エルマンはそう言って頭を下げます。後ろに控えていた数人の男たちもそれに倣います。

エルマンを見つめるハイネの表情はいつもより深刻そうな顔をしていました。

「あの…エルマンさん。」

ハイネは男に呼び掛けました。

「私、まだ信じられないんです。」

今まで平穏に暮らしてきたのに…」

ハイネは目を伏せました。

……誕生日から半月が過ぎてました。  
16年間普通の村の娘として暮らしてきたのに、今になって彼女は  
一国の姫である事を告げられたのです。

エルマンと呼ばれた巨体の男は少し憐れみのこもった瞳で見詰めま  
す。

「今まで、さぞ辛い暮らしだったでしょう。」

エルマンは頭を垂れた。

「ですが、これからは……」

元のあるべき生活に戻り、城で幸せに暮らすことができます……

エルマンはそう言おうとしました。エルマンにとってはそれが、当  
然のことだと思っていたからです。

しかし、ハイネは目を丸くして、それを遮ります。

「いいえ、辛いだなんて……私、とても幸せでした。ただ……」

ハイネは後に言葉が続きませんでした。

自分が一国の姫であったこと、ドラゴンに生け贄として差し出され  
そうになっていたこと。それを阻止するために村で静かに過ごして  
いたこと。

そして、後々には城に戻らなければならないこと。

全てが一度に知らされて……

ただ、正直言うともう少しここにいたいという気持ちがありました。  
でも、きつとそれは叶わないのでしょうか。

ハイネはさすがのような気持ちで、首もとにあるペンダントに手を添  
えました。

それは、ハイネの誕生日にと、後日コネリーから貰ったものでした。首から銀色の金具で吊り下げられた先に、水晶がぶら下がっています。それは、光を反射してアイスブルーにもピンクにも様々に見えました。

挨拶を済ませたエルマンは軍に指示を出します。

しばらくして、エルマン率いる兵士たちが村から出ていきました。姫の護衛をするようにと、エルマンの残した精鋭たちがハイネの家の前に立っています。

それは、微動だにしません。

きつと、城に着いたらこういう人たちがばかりなんだろうな、ハイネは思います。

村を出ていった兵士たちがここから見ると小さくなっていきます。それを、じつとハイネは見つめます。きつと、使いの者がすぐに来るでしょう。

家の中に入ると、意気揚々としたメアリーが言います。

「ハイネ様。さ、数日もすれば使者が参ります。今日から支度で忙しいですわ。」

メアリーはせかせかと、家のなかで準備を始めました。

数日、かあ……

ハイネはぼつと宙を見つめていました。

しかし、はっと気づきます。

「ねえ、メアリー、さよならの挨拶も言いに行っではいけない？」

メアリーは怪訝そうにハイネを見つめます。

「挨拶とは……？どちらに。」

「牧場の人たちに！」

そう言うとハイネは外に駆け出していました。

お待ち下さい、ハイネ様！！  
後ろからそんな声も聞こえましたが、構わず走りました。きっともう会えなくなるかもしれないのに！

メアリーには”牧場の人たち”と言いました。実際にはコネリーのことを指しますが。

ハイネは特定でコネリーと言うのが出来ませんでした。そう言うと、メアリーは決まって疑わしげな目で見てくるから……何故？…って、それはハイネには分かりません。

メアリーは彼の事が嫌いだったのかも知れませんが、もしかしたら、特定で親密な異性を作らせたくなかったのかも知れません。

でも、ハイネからしたら、あんなに優しい人を嫌いになれるはずも無いと思っていました。

だから、今思えば、メアリーはハイネをいろんな悪い虫から守ろうとしていたのかもしれない。きっと。

村の通りを横切った外れに彼の牧場がありました。

空は赤く、周りの木々や草原などが影で黒っぽく見えます。そして、冷たい風がハイネの周りを突き抜けていきます。

夕方なので牛たちは中にいるのでしょう。あたりには風の音と葉のざわざわ揺れる音しか聞こえません。

コネリーはどこだろう？

ハイネは辺りを見回します。いつも、のどかなその場所は今日に限って寂しげに感じました。

赤く染まった空のせいでしょうか。

それとも、ハイネ自身が寂しい気持ちで一杯だからでしょうか。

「コネリー!!」

ハイネは大きな声で呼びます。

いつもなら、彼は少し寝癖のついた顔をひょっこり出して、なんだい？なんて言ってくるのに…

そう、あの牛小屋から……もしくはあの物置小屋から。それが、もう家の中に入って夕食の支度をしているのかも知れません。

きつといつもの事なのに、ハイネはなんだかよく分からない焦燥感にかられたのです。

広い牧草地のなかで、ハイネは辺りを見回していました。

なぜか、コネリーが此処にはいない気がしました。

そして、ふいに、ハイネは遠くに見える小さな森に目を移します。

此処から見ると小さな森。昼間しか見てみませんでした。今の時間見ると、とても不気味に見えました。

黒い闇がその森を覆っています。

ここからでも分かりました。森全体がごうごうと風で嘶いているのが。

そのまま、ハイネはじつと森を見詰めていました。

すると、此処からは曖昧ですが、男の人の影が森に入っていくのが見えました。

灰色のつなぎ姿、金色のふわふわした髪が見えました。

「コネリー？」

ハイネは一瞬目を疑いました。

”夜の森に、入ってはいけない。”

前にコネリーから言われた気がします。でも、その夜の森に今、コネリーは入っていいこうとしてました。

ハイネは一瞬コネリーなのかを疑います。だって、あんな平然と真つ暗で不気味な森に、一人で入っていくなんて。今までのコネリーからするとあり得ません。

今、遠くから見えるコネリーの様子は、まるで別人のようで……

ハイネは不安になりました。

もうすぐ、城に戻らなければいけない日が来るのに。

すぐ近くまである種の不吉なことが迫ってきているように感じたのです。

何故か、今コネリーを追いかけていってはいけない、とさえ心の奥底で感じました。

でも、今追いかけるければ、きっともう会えないかもしれない。

太陽がもう沈みそうでした。もうじき、真つ暗な闇が訪れます。

ハイネは空を仰ぎ見ます。そして、決心したように深呼吸をするとコネリーの入っていった森へと駆け出しました。

## 黒 始まり(前書き)

なぬ……更新が物凄く遅れてしまいました(★|★)

## 黒 始まり

長い牧草地を越え、ハイネは夜の森の入り口までやって来ます。森は黒く沈んでいて、ゴウゴウと風で唸っていたのです。

森の手前、ハイネは無意識にゴクリと唾を飲み込んでいました。ふと、後ろを振り返ります。

もしかして、私の見た、森に入っていた男の人は違う人だったかもしれない、と。

でも、振り返った先にあつたのは、いつもと変わらない静かな牧草地だけでした。そこには、誰の影も見当たりません。

” ああ、もうきつと後には戻れない。”

ハイネは森の中へと足を踏み入れます。深い闇の中へと。

ザクザクと地面に落ちている枝や枯葉を踏みながら歩きます。時おり、ハイネは彼の名前を呼んでみますが返事はありません。黒く曲がりくねった枝が頭上を覆い、枝から目の光った大きな鳥が

何羽もじいっとこちらを見てきます。まるで、侵入者を威圧するよ  
うに。

ハインは妙な緊張感に包まれます。

いつも、陽の出ているときに来る森とは全然違いました。昼は地面  
に落ちた枯葉も、枝に付いてる緑の葉もそれぞれが森を美しく彩っ  
ていました。動物の顔ぶれだって違います。

夜の森は全然違うとは、知ってはいても実際に体験するのとは違  
うことでした。

”コネリー。どうしてこんな怖い森に入ってしまったの？”

ハインには不思議でした。

早く家に帰りたい気持ちもありましたが、コネリーの事が気にかか  
ってこのまま帰る気になれません。

ハインはコネリーを探して薄暗い森のなかをぐるぐると回っていた  
のです。

その頃……

とある場所に向かって黒い風が集まっていました。

広大に見渡せる森の奥に、その風の集まる場所があります。

真っ暗な闇の中、青白い月がそれを照らします。

”それ”とは……

月明かりに照らされた大きな大きなお城でした。

そのお城は所々、城壁が剥がれていてシダや蔦が絡まっています。見  
るからに不気味で近寄りたくはない雰囲気のある場所でした。

そのお城の一番上の塔に、ある人影が見えます。それは、こんな闇夜だと言つのに何の灯りも点けず、ただじつと外を見ていたのです。

しばらく、窓辺で外を見ていましたが、その者はふつと黒い風となつて空へと飛び立ちました。

星と月が照らす空を黒い影が覆います。

ハインは少し怖くなってきていました。もう、こんなに遅くなつてしまい、しかも、コネリーだつて見つかりません。

メアリーにも心配をかけてしまつし……

もしかしたら、コネリーはもう森を出ているかもしれないなんて……今更思つてしまったのです。

ハインは、元来た道を戻ろうとしました。

ザクザクと地面の葉を踏んで、ハインは歩き出します。

何やってんだろ、私……。少し、慌ててたのかな。帰ったらメアリーに叱られそう。なんて思いつつ。

しかし、そこでハインは木の影からちらりと見える人影に気がつき  
ます。

それは、紛れもなく……

「コネリー！」

ハインは叫びます。

本当だったらこんな風に叫んだりしないけど、一人で闇夜の森を歩き回つていて半分泣きたい気持ちになつていたからです。

コネリーはいつものやんわりした笑顔を向けることなく、嘲るような笑みを浮かべたのでした。でも、それは、ほんの一瞬のことです。すぐに、優しげな笑みを浮かべます。

「やあ」

闇夜の森の中で、彼はこれ以上無いくらいに冷静に見えました。いつもの冴えない雰囲気ではなく、どこか艶があったのです。少し違和感を覚えつつも、ハイネは近づきます。

「こんな、夜の森に何しに来たんだい？」

男はハイネを見下ろします。しゃべり方は同じなのに……その目はきつと、コネリーでは無い……

ハイネの頭の中で警報が鳴り出します。

ハイネはとつさにそこから逃げようと思いました。しかし

ハイネが動くより先に男の手が、ハイネの首筋に掛かります。

見れば、指先には人とは思えないほどの鋭い爪が生えていました。

その爪が今にもハイネの首もとを抉るように突き立てられています。

男の顔にはさつきまでの笑みはありません。

じっと、少女を鋭い目で眺めます。

ハイネは自分の生命の危機に怯えながら、息も絶え絶えに訊ねます。

「あ、あなたは…誰？」

男は依然として無表情で、首元に爪を当てたままでした。

「我はドラゴン。お前を生け贄として貰う。」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3820u/>

---

純白

2011年9月12日23時36分発行